

東西文化の多様と共存モデル

—「東方キリスト教圏」を多角的に考える学際的試み—

2015 京都大学 分野横断プラットフォーム構築企画
(研究大学強化促進事業「百家争鳴」プログラム)

会期 2016年1月31日(日)

会場 京都大学吉田キャンパス本部構内

文学部新館第7講義室(プログラム第一部)

文学部新館第1講義室(プログラム第二・三部)

企画代表者：杉本淑彦(京都大学文学研究科二十世紀学専修・教授)

主催：東方キリスト教圏研究会(The Society of Oriental Church Area Studies)

e-mail：eoas.office@gmail.com

web site：http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/~hayakawa/eoas/index.html

Tel：090-3783-3780(企画担当：福田耕佑)

共催：京都大学 学際融合教育研究推進センター

ワークショップ日程

10:30 受付開始（文学部新館第7講義室）

10:50 開会挨拶

第一部 研究発表（司会：青山忠申・京都大学文学研究科・MC）

（発表時間：30分・質疑応答：15分）

11:00 研究発表①【ユダヤ学】

発表者：手島勲矢（同志社大学神学部元教授）

タイトル：「聖書翻訳とヘブライ語聖書—東方教会を考える一つの視点」

コメンテーター：武藤慎一（大東文化大学准教授）

11:45 研究発表②【キリスト教神学】

発表者：ブラジミロブ イボウ（京都大学文学研究科・DC）

タイトル：「真理の柱—パーヴェル・フロレンスキイ神父の思想と時代をめぐって」

コメンテーター：上原潔（大阪産業大学教養学部・非常勤講師）

（休憩：12:30 - 13:30）

13:30 研究発表③【天文学】

発表者：河村聡人（京都大学附属花山天文台・DC）

タイトル：「太陽学者から見た天変の歴史：空白のユーラシア中央部」

コメンテーター：作花一志（京都情報大学院大学教授）

14:15 研究発表④【科学史】

発表者：細川瑠璃（東京大学地域文化研究科・MC）

タイトル：「パーヴェル・フロレンスキイの天動説」

コメンテーター：中村唯史（京都大学文学研究科教授）

15:00 研究発表⑤【歴史学】

発表者：上柿智生（京都大学文学研究科・DC）

タイトル：「ビザンツ帝国におけるローマ人意識の展開と変容—後期ビザンツ研究からの視点」

コメンテーター：井上浩一（佛教大学歴史学部特任教授）

第二部 （会場：文学部新館第1講義室）

オーディエンス参加型フリップディスカッション（司会：福田耕佑・京都大学文学研究科・MC）

15:45 開始

主題：「東方キリスト教圏とは何か？」

第三部 総括（早川尚志・京都大学文学研究科・MC）

17:15 開始

17:45 閉会挨拶

懇親会

午後6時半より開催されます。

ワークショップ・例会が終了次第、係の者が会場に誘導いたします。当会場から徒歩10分程です。

参加を御希望の方は受付にて御申し付けください。

第一部研究発表要旨

研究発表①【ユダヤ学】

発表者：手島勲矢（同志社大学神学部元教授）

タイトル：「聖書翻訳とヘブライ語聖書—東方教会を考える一つの視点」

コメンテーター：武藤慎一（大東文化大学准教授）

【要旨】

「東方」という概念は、教会史の中では、「西方」ローマ・カトリックの組織体との対比において説明されるのが常であり、その「西方」と「東方」の区別は歴史的な経緯や典礼の違いにおいて自明とされる。文明史を考える上でも、「西方」と「東方」の区別は重要視され、とりわけ『文明の衝突』の著者ハンチントンは、イスラム文明、西欧文明、ロシア正教会文明、ラテン・アメリカ文明の四つを認識する。だが、彼の一枚岩のイスラーム文明の認識は、昨今のシーアとスンニの衝突の現実とうまく整合しないように、程度は違うが東方教会を一枚岩としてみる文明観も、カルケドン公会議をめぐる対応の差異を考えると問題がなくはない。西方と東方をめぐる文明的な差異は、教会史の枠組みからだけでなく、ユダヤ・キリスト・イスラームを貫く一神教の伝統からも見直す必要があると考える。

すなわち一神教は、聖典の宗教伝統であり、一神教の諸文明は様々な形式をとるとしても、間接的に、直接的に、神の言葉のテキストがその土台である。その点で宗教改革の有無は、「西方」と「東方」文明の違いとして、よく指摘される点だが、これは、聖書翻訳とヘブライ語聖書の関係において考えるべき違いである。すなわち「聖典のみ」を掲げた16世紀プロテスタントの自信は、ユダヤ学者からヘブライ語文法を学び、ヘブライ語聖書の伝統を知ることによって支えられているものであり、それはヘブライ語聖書本文の回復の努力に、また高等批評へと展開し、それまでの聖書理解を一新してユダヤ教の近代化にも大きな影響を及ぼす。

ヘブライ語聖書の歴史研究において西方のキリスト教は東方よりも活発な印象だが、これにはヘブライ語本文からウルガタ訳を用意したヒエロニムスのヘブライズムの影響も大と思われる。それに対して、東方キリスト教圏では、それぞれの言語の聖書翻訳が古くより固定していてヘブライ語回帰の情熱は顕著には認められない。ただ例外的なのは古代のシリア教会で、二世紀にはヘブライ語聖書から直接に訳されたシリア語訳（プシータ）を生み出し、その後のシリア教父たちも膨大な聖書研究の集積を残している。でも、なぜヘブライ語聖書への興味がその後の東方教会では希薄になるのか？ユダヤ教におけるヘブライ語聖書と翻訳の関係およびローマ法やカライ派の情報も交えながら考えてみたい。

研究発表②【キリスト教神学】

発表者：ブラジミロブ イボウ（京都大学文学研究科・DC）

タイトル：「真理の柱—パーヴェル・フロレンスキイ神父の思想と時代をめぐって」

コメンテーター：上原潔（大阪産業大学教養学部・非常勤講師）

【要旨】

ロシアには古くからキリスト教プラトン主義の伝統がある。パムフィル・ユルケヴィッチ（1826-1874）は論文「イデア」（1856）の中で、プラトンの詩学を唱え、カントからプラトンへの回帰を呼びかけた。彼の弟子であるブラジミル・ソロヴィオフ（1853-1900）は、ヨハネ福音書における「ロゴス」を「言葉」ではなく、「意味」と訳した。しかし、この「意味としてのロゴス」を哲学として完成させたのは、パーヴェル・フロレンスキイであると本発表で述べたい。彼はその哲学を「具体的観念論」と名付け、受肉した意味を論じている。

パーヴェル神父の思想研究は始まったばかりであり、特に日本においてはこれから期待される研究テーマだと言える。本発表を通して、パーヴェル神父の具体観念論を明らかにしたいと考えている。

研究発表③【天文学】

発表者：河村聡人（京都大学附属花山天文台・DC）

タイトル：「太陽学者から見た天変の歴史：空白のユーラシア中央部」

コメンテーター：作花一志（京都情報大学院大学教授）

【要旨】

太陽研究において、長期の太陽活動については伝統的に議論が続いているが、近年その議論が再び活性化している。それは太陽での大規模かつ非常に稀な爆発的現象の発生の可能性が示唆され、また近年の太陽活動の変調に危惧する風潮が醸造されてきているからである。しかしながら、太陽活動の近代的な観測はガリレオ・ガリレイらを始祖とする高々400年程の歴史であり、太陽の長期活動の議論においては貴重ながら限定的な知見を供するにとどまってしまう。そこで我々は、人々の記録に残る太陽活動の痕跡を発掘し、少しでも情報を増やそうと試みている。

当発表においては太陽研究者から見て、古代のシンボルや記憶に見る天変と太陽活動とが如何に結び付くのか、いくつかの例を紹介する。太陽にまつわる天変の筆頭はやはり日食であろう。日食に関しては斎藤尚生著「有翼日輪の謎—太陽磁気圏と古代日食」（198

2年、中公新書)のレビューを通して議論する。また、太陽に起因する天変としてオーロラについても、我々の最近の研究を基に紹介する。

当発表を通して紹介する事例は直接的に東方キリスト教圏には位置しないかもしれないが、これは関連する記録が東方キリスト教圏に存在していたとしても未だ太陽研究者コミュニティには知られていない状態である証左でもある。諸氏の研究活動の中で天変の記録を発見した際には太陽研究者にもお知らせ願いたい。当発表がそのきっかけとなれば幸いである。

研究発表④【科学史】

発表者：細川瑠璃（東京大学地域文化研究科・MC）

タイトル：「パーヴェル・フロレンスキイの天動説」

コメンテーター：中村唯史(京都大学文学研究科教授)

【要旨】

目的

本研究の目的は、ロシア正教の司祭であり、科学者でもあったパーヴェル・フロレンスキイ（1882-1937）が、20世紀初頭に何故天動説を主張したのか、フロレンスキイは天動説を主張することによっていかなる宇宙観を示そうとしたのか、という問いに答えることである。本研究では、主にフロレンスキイが天動説について明確に言及している著書『幾何学における虚数性』（1922）、及び同書に関わりが深いと考えられるフロレンスキイの数学に関する思想に着目した。

『幾何学における虚数性』

『幾何学における虚数性』は全9章から成り、このうち1章から8章では、実数と虚数を、それぞれ平面の表と裏として捉える解釈が示される。9章では、1章から8章で論じられた虚数性と、ダンテの『神曲』とその中に表れているアリストテレスの宇宙観、アインシュタインの相対性理論が組み合わされ、フロレンスキイ独自の天動説が展開される。その際の論法は、次のようなものである。天動説をとっても、地動説をとっても、起こる現象に違いはない。その前提の上で、フロレンスキイとほぼ同時期に地動説と天動説について論じた数学者ポアンカレ（1854-1912）や物理学者マッハ（1838-1916）は、地動説のほうが自然現象を記述するのに便利であるから、地動説を採用すべきであるとした。同じ前提を共有した上で、フロレンスキイは、天動説を採用する。それは、天動説を用いることによって記述しやすくなる何物かがあるからである。それでは、フロレンスキイが天動説を用いて記述すべきであると考えた内容とは何であろうか。この問いを考えるにあたって、フロレンスキイが『幾何学における虚数性』の9章の最後に「虚数への恐怖と不連続性への恐怖か

ら解き放たれても良い頃である！」と述べていることに着目する。ここから、虚数と不連続性が、フロレンスキイの天動説の最も重要な特徴であると考えられる。

不連続性

不連続性は、フロレンスキイの数学に関する思想の中で核となっている。フロレンスキイは、ルネサンス以降、連続性の概念があらゆる分野で支配的になっており、不連続性が軽視されているが、連続性は不連続性の特殊な一例にすぎず、不連続性は連続性に先立つと主張している。連続性は変化の限界を持たず、それゆえに全体としての形が欠如しているが、不連続性は変化の限界が規定されているため、全体としての形を有している。不連続性は、フロレンスキイにおいて、さらに現実的無限という概念とも結びつく。現実的無限と対立する概念である潜在的無限は、変化のプロセスとしての無限であり、連続的であるが、現実的無限はいかなる有限定数よりも大きな定数のように、数学的実在性を持った無限であり、不連続的である。フロレンスキイは、著書『真理の柱と礎』（1914）の中で、真理＝神を、現実的無限であるとしている。フロレンスキイの考えにおいて、現実的無限の存在を認めることは、神の存在を認めることである。

結論

フロレンスキイが天動説を主張することによって示した宇宙観とは、宇宙が実数の特徴を備えた地上的領域と虚数の特徴を備えた天上的領域という二つの相反する側面の、不連続で、かつ離れることのできない結合によって成っているというものであり、フロレンスキイはこのことによって、現実的無限としての神の存在を、我々の地上との不連続な結びつきの中で示そうとしている。

研究発表⑤【歴史学】

発表者：上柿智生（京都大学文学研究科・DC）

タイトル：「ビザンツ帝国におけるローマ人意識の展開と変容—後期ビザンツ研究からの視点」

コメンテーター：井上浩一（佛教大学歴史学部特任教授）

【要旨】

海外・国内ともにビザンツ帝国の国制や皇帝理念に関する研究や議論は活発に行われてきた一方で、帝国を担った人々である「ビザンツ人」あるいは「ローマ人」の集団としての定義や性格については、その「超民族性」が強調される傾向はあるものの、ネイションの形成過程に関する研究の（いささか古典的な）成果に応答する形では、十分に検討されていないように思われる。従って、本報告では Anthony Kaldellis の「ビザンツ帝国はネイシ

ョン・ステイトである」との主張をたたき台に、ローマ人という集団の要件について一つの見通しを立てることを試みる。(あわせてそのローマ人集団の性格が特に後期にどのように変化していったかにも言及する)

国民国家の担い手たるネイションの成立は近代の到来によって初めて可能になったというのが現在では有力な説の一つである。ベネディクト・アンダーソン流に言えば、行政俗語あるいは出版語の成立と軌を一にした出版資本主義の発展が、「メシア的時間 (ベンヤミン)」とは違った「均質で空虚な時間」において生まれる新しい同時性に基づいた「社会」や「国民」を想像することを可能とし、中世以前の普遍語に基づいた「宗教共同体」と、権力の作用において不均一な空間からなる「王国」という 2 つの文化・政治システムを決定的に減衰させていった、ということになる(『想像の共同体』)。ただしこれは近代のネイションがそれ以前の共同体のあり方から全く断絶しているということの意味しないだろう。アントニー・スミスは、近代のネイションは明確な領域性、法的・行政的な均一性、あるいは経済的な統一性という際立った特徴を持つものの、共通の歴史や血統や文化という感覚の共有も必要としており、それらは先立つ時代のエトニ(エスニックな共同体=ネイションと比較して水平方向あるいは垂直方向にその範囲が限定されていることが多いとはいえない)から取捨選択されて変形されたものであるとする。エトニの成員の感情的紐帯の基礎となっているのは共有された「神話・記憶・価値・象徴」であり、それらはより具体的には「集団の名前」「共通の血統神話」「歴史の共有」「独自の文化の共有」「ある特定の領域との結びつき」「連帯感」といった要素となってエトニを形作る(『ネイションとエスニシティ』)。

ベックが言うようにビザンツ帝国には「前史や先史が無い」ことを特徴としており、そのことが「ローマ人」の共同体の構成要件に「血統(神話)」が含まれない一要因となっていると思われる。ただし、Anthony Kaldellis は *Hellenism in Byzantium*(2007)において主張するところによれば、ローマ人は宗教・言語・芸術と建築・歴史・国家と法律・習俗・物質的条件を共有しており、「どれほど希薄にせよ少なくともある程度共通した政治機構と共同体の成員全てを対象にした権利と義務に関する単一の法体系」「国家によりコントロールされ宗教的もしくは歴史的な協同により安定化した領域」「住民もしくは少なくともその「核」になる集団において共通の価値と伝統の尺度」といったスミスの基準に依拠してビザンツ帝国は「ネイション・ステイト」であるとする。さらに彼はこの説にとって障害となりうる、「多民族帝国」「普遍主義」というビザンツ帝国にまつわる通念を打破しようと試みる。いわく、「ローマ人」の要件に民族的出自は入っておらず、他方文化的同化は要求されるので、意図的に多民族の共存をはかり、それらの固有性を維持しつつ包摂する性自体という意味における「多民族帝国」ではなく、またビザンツ帝国の普遍主義的、あるいはエキュメニカルなイデオロギーは主に外交の領域でのレトリックやプロパガンダの側面が強く、実際にはビザンツ帝国は他国の正統性を認めていて「国境なき帝国」ではなく、またローマ人となるには正教への改宗のみならず「習俗」や「法」を受け入れることが必要であっ

た。

ビザンツ帝国の行政機構が、Kaldellis が主張するように帝国を単一の法的空間とし、その隅々にまで共通の習俗文化を浸透させるほどに強力であったかどうかについては疑問が残るし、その意味でビザンツ帝国をネイション・ステイトと呼んでローマ人を近代的なネイションの概念と直結させることは躊躇せざるをえない。他方で普遍的側面が強調されがちなローマ人概念の固有性・排他性の側面に光を当てた意義は大きい（じっさい、「正教」という要素でさえもギリシア語の通用域および相互浸透的ダイアグロシアという要因から、ローマ人の固有性の拠り所となった場合もあったかもしれない）。また、帝国内における「ローマ人」の要件を満たさないエスニック・マイノリティの存在が、そのまま「多民族帝国」の証拠として採用できないことは、現代国家とのアナロジーによっても理解できることである。ともあれ、ビザンツ帝国の「ローマ人」は共通の「血統神話」こそ有さないものの、その他の共有物から（形容矛盾的ではあるが）一種のエトニとみることができるとはいだろうか。ただしそこには自他を区別する排他性を有しつつも同化という形での包摂性を持つという顕著な特徴が存在した。加えてエトニの感情的紐帯の媒体となる象徴や神話（例：首都コンスタンティノープルやビザンツ皇帝理念）がローマ人にとって意味あるものであるのみならず、そうでない人々にもその特権的意義を主張するものであったという事情が、ローマ人概念により普遍的な外被をまとわせる結果になったものと思われる。

第4回十字軍以降の時代になると、(旧)ビザンツ世界における政治的分裂と、ラテン人との接触の増大に起因して、歴史書・年代記などに現れる「ローマ人」の用例は、政治的帰属を示す場合もあるものの、エスニックなニュアンスが強くなっていった（依然として起源神話に拠るわけではないが、ラテン人との対比において「先住」の歴史や正教信仰の共有とも結びついた血統意識が強くなっていったと考えられる）。同時に「ロマニア」という表現も現実のビザンツ系国家の支配領域を超えたローマ人の居住域を意味するケースが見られるようになる（Gill Page, *Being Byzantine* (2008)）。この点で「ローマ人」の集団は後期ビザンツ時代にはより典型的なエトニの定義に接近していったとみられ、それがオスマン帝国時代のギリシア系住民のアイデンティティへと引き継がれたと考えられる。

2015 京都大学 分野横断プラットフォーム構築企画ワークショップ組織委員会
東方キリスト教圏研究会事務局

企画代表者：杉本淑彦（京都大学文学研究科二十世紀学専修・教授）

企画メンバー：福田耕佑・早川尚志・青山忠申・曾我篤嗣（京大院・文）河村聡人（京大・花山天文台）黒澤巖（京大院・農）

連絡先

e-mail : eoas.office@gmail.com

web site : <http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/~hayakawa/eoas/index.html>

Tel : 090-3783-3780(企画担当：福田耕佑)

共催：京都大学学際融合教育研究推進センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

文学部東館 3F358 号室

TEL:075-753-5338(内線 5338)